【郷土史への扉】

イノシシに守られた神様

平成十九年は干支でいえばイノシシの歳。牧園町の犬飼滝の少し上手に和気神社という神社があります。そこには白イノシシが飼われていることで有名ですが、ご存じでしょうか。和気神社に祭られている神さまは和気清麻呂といいます。

奈良時代、時の女性天皇、称徳天皇が僧の道鏡と仲良くなり、ついには道鏡に天皇の位を譲ろうとしたことがありました。和気清麻呂は、そのことの良し悪しを宇佐八幡宮の神さまに聞きに行き、「日本の国が開かれて以来、臣下が天皇の位に就いた例がない、正統者でない者は排除せよ」との八幡神のお告げをそのまま天皇に報告したため、道鏡の怒りに触れ、大隅の国に流されたといわれています。このため、和気清麻呂は、皇室の危機を救った正直者の忠臣として、戦前の教科書などに取り上げられ、またお札にも肖像が載りました。

こんな歴史上の人物の神社がなぜ牧園にあるのでしょうか。牧園では清麻呂が流されてきたのはここだと昔から信じられているようです。実は道鏡が皇位をねらった事件のことは、『続日本紀』（七九七年に成立）の神護景雲三年（七八九）の所に載っています。その九月の項に「道鏡大いに怒りて、清麻呂が本官を解き、出して、因幡の員外の介と為す、未だ任所に行かずして、尋いで詔有り、除名して大隅に配す」と見えます。

このように、官選の正史にはただ「大隅に配す」とあるだけで、具体的な地名などはまったく書かれていません。

しかしながら、清麻呂が牧園に流されたとの説は古くからあったようで、白尾国柱が寛政七年（一七九五）に出した『麑藩名勝考』、桑原郡踊郷中津川村の項にこう言っています。

「此（の）稲積里ハ孝謙天皇　和気朝臣清麻呂を大隅国に流されし時の配所也といへり」＊孝謙＝称徳

しかも、その注記に「『圃老巷談菟道園』といふ草子に、和気清麻呂　大隅国桑原郡仲津川に謫れし事」が書いてあるとして、その後に、道鏡によって「清麻呂が足の筋をたたせ、名を穢麻呂と呼かへ大隅国へ流しける」と紹介しています。

ただ牧園に流されたという説は根拠が無いのかというと、いや大いに有りと答えたい。

その一、牧園付近には、大分・宇佐地方の移住民が来た可能性があること。『続日本紀』和銅七年（七十四）三月の条に「隼人昏荒、野心ニシテ未ダ憲法ヲ習ワズ、因リテ、豊前国ノ民二百戸ヲ移シ、相イ勧導セシム」とあります。

和銅六年は大隅国が置かれた年で、その翌年に大分地方から二百戸の移住者が来ている訳です。奈良時代の一戸は大家族で二十人ほど、二百戸で四千人、当時の一郷は千人として、四つの郷ができる計算になります。大隅国府の周辺に隼人監視の目的で移民を配置したのではないか。その手がかりは、中津川とか犬飼とかの、大分地方の地名に共通した名前が存るということ。これは溝辺も同じ。大隅国府の土木作業（溝作り等）に従事した人たちが移住したことによる地名と思われます。大分の方には「溝部」という姓の人がおります。

清麻呂と牧園とのつながりは、この大分・宇佐地方の人々の移住がカギではないかという気がします。宇佐地方から移住した人々が、清麻呂を受け入れる下地が牧園にはあったということが考えられます。

その二、牧園は大隅国府に近い場所であること。天皇に仕えた高位の官人が流されて来るのに、国司がこれを知らないはずがありません。国司の目の届く所に清麻呂は流されたと考えられます。当時の法律を定めた『養老律令』には「凡そ国の守は、年毎に一たび属郡に巡り行いて、風俗を観、百年を問い、囚徒を録し」とあります。「囚徒を録す」とは「罪人の数を知り、郡司の考に附す」と解説されています。（国司：守・介・掾・目）

幕末の名君と謳われる島津斉彬は、嘉永六年（一八五三）領内東方海岸の防備を充実するため、大隅、日向を巡検した際、犬飼滝に立ち寄り、その景勝を愛で、家臣に清麻呂の事跡を調査するように命じたとのことです。これが基になって、昭和十八年、和気神社の建設が実現したことは『忠烈和気清麻呂公』（昭和五十九年復刻版）にくわしい。

さて肝心の清麻呂とイノシシとのつながりは、と聞かれるとあまり確かな根拠は見当たりません。清麻呂が大隅に流される途中、宇佐八幡に立ち寄った。その時、豊前国楮田村という所でどこからともなく三百匹ばかりのイノシシが出てきて、輿の前後を取り巻き宇佐八幡まで警護した、という話が伝えられているのみです。

文責＝藤